

## 結婚の質に及ぼす夫婦間ユーモアの影響

周 玉慧                      深田 博己                      牧野 幸志  
(台湾 中央研究院)              (広島文教大学)              (摂南大学)

本研究では、ユーモア的コミュニケーションに着眼して、夫婦間に発生するユーモア動機とユーモア表出を測定し、結婚生活の質に及ぼすユーモア動機とユーモア表出の影響を検討した。139組の日本人夫婦を対象とし、3因子のユーモア動機(利己的、利他的、関係配慮的)、3因子のユーモア表出(自己卑下、相手攻撃、言語遊戯)、および2側面の結婚生活の質(充実度、後悔度)の評価を求めた。確証的因子分析の結果により、仮定されたユーモア動機とユーモア表出の因子が実証された。妻よりも夫の方が関係配慮的動機、言語遊戯の表出度、結婚生活の質は高かった。結婚生活の質はユーモア動機やユーモア表出によって異なり、関係配慮的動機や言語遊戯表出は良い影響を及ぼすことが見出された。また、後悔度に及ぼすユーモア動機とユーモア表出の交互作用が見られ、高い利己的動機からの多量な相手攻撃表出が後悔度を増加させる効果が示された。

**キーワード** : ユーモア動機、ユーモア表出、結婚生活の質、夫婦ペア、階層線形モデル

### 問 題

ユーモアは個人の情緒の安定化、様々なストレスの予防あるいは緩和、対人関係の維持、対人コミュニケーションの円滑化などの機能をもつと考えられ、そのため多くの研究が行われてきた。過去の研究では、多様な視点からユーモアを捉える試みが実行されてきた。例えばユーモアの創造力、理解力や鑑賞力のようなパーソナリティ的特性(e.g., Martin, 2001; Svebak, 1996)、ユーモアに対する態度や評価(e.g., 上野, 1992, 1993)、ユーモアのスタイルや表出(e.g., Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray & Weir, 2003; 塚脇・樋口・深田, 2009a)、ないしユーモアの機能や効果(e.g., 牧野, 1999)などが検討されてきた。

近年、ユーモアに関する研究は、個人がどのような相手に、どのような動機が働いて(ユーモア表出の動機づけ、以下“ユーモア動機”と略称する)、どのような形態のユーモアを表出するのか(ユーモア表出のタイプ、以下“ユーモア表出”と略称する)、ユーモア表出はどのような影響をもたらすのか、などの問題に取り組むことによって、より精緻的に展開されてきている(石原, 2014; 周, 2018; 宮戸, 2016; 谷・大坊, 2008; 塚脇, 2018; 塚脇・深田・樋口, 2011; 塚脇・平川, 2012; 塚脇・越・

樋口・深田, 2009b; 葉山・櫻井, 2008 など)。こうしたユーモア研究の展開の方向性は、ユーモア生起過程とユーモア影響過程の双方を含むユーモア過程全体の俯瞰的研究に繋がる。しかしながら、大多数の研究は“個人”のユーモア過程に焦点化しており、ある特定の関係、特にカップルや夫婦間のユーモアを論じる研究は、国際的にも日本国内的にも少ない。日本で夫婦間のユーモアを取り上げた研究は、わずかに阿部（2018）の一研究が見られるに過ぎない。阿部（2018）は、749組の日本人夫婦を対象にして Web 上でユーモアを高めるための 2 週間のトレーニング（介入）を行ったが、介入効果は有意傾向を示すにとどまった。阿部（2018）の研究は、ユーモア過程を積極的に解明する研究ではない。

本研究の目的は、日本人夫婦を対象として、夫婦がお互いにどのような動機で、どのような形態のユーモアを表出し、そのような動機の種類や表出の形態が夫婦の生活（結婚生活の質）にどのような影響を及ぼすのか、を明らかにしたい。こうした本研究の視点は、夫あるいは妻のユーモア過程を個人過程として扱うのではなく、夫婦間のユーモア相互生起過程およびユーモア相互影響過程、すなわち夫婦間のユーモア相互過程として扱うことを意味する。

### 夫婦間ユーモアとその影響

海外でも、付き合っているカップルや結婚しているカップルに関するユーモアの研究は量的にそれほど多くないが、先行研究に共通する主な結果として、カップル間のユーモアとお互いの関係の満足度との間に正の関連があることがと示されてきた。例えば、パートナーがよいユーモアセンスをもつほど、夫婦はお互いの関係に満足している (Rust & Goldstein, 1989; Ziv & Gadish, 1989)。Lauer, Lauer & Kerr (1990) は、結婚生活が 45 年を超える 100 組みの夫婦を対象として、結婚が安定して長く続けられる秘訣を尋ねたところ、もっとも重要なものの 1 つが「一緒によく笑うこと」であることを発見した。Ziv & Gadish (1989) は、ユーモアと結婚満足度の関係を検討し、配偶者が自分のユーモアを称賛すればするほど、あるいは配偶者がユーモアを創造すればするほど、自分の結婚満足度が高くなるという「相互依存 (complementarity)」仮説を提案し、この仮説を実証した。

しかし、ユーモアは夫婦関係に対して必ずしも好影響をもたらすとは限らない。例えば、Cohan & Bradbury (1997) は、新婚夫婦を対象として、結婚生活の問題に関する対話中に、妻が怒りを表出すれば、18 ヶ月後に関係満足度が高くなるのに対し、夫がユーモアを用いれば、18 ヶ月後に離婚可能性が高くなることを発見した。こうした結果に関しては、夫婦がストレスフルな出来事に出会うとき、夫がユーモアを用いることは、問題を積極的に解決しようとせず、むしろ問題を逸らし避けようとすることに繋がり、短期的に不安や悩みが減少するが、結婚の長期的な安定性を害してしまう、と解釈される (Overall, Fletcher, Simpson & Sibley, 2009)。また、夫婦間のユーモアは単一でポジティブな構成概念ではなく、ユーモアの低位概念を区別することによって、ユーモアの有益な使用と有害な使用とを明確に区別することに留意すべきである (De Koning & Weiss, 2002)。

既婚者を対象とした De Koning & Weiss (2002) は、道具的ユーモア (例：ユーモアを使用して喧嘩を避ける)、ポジティブなユーモア (例：ユーモアはパートナーとの親密さを高める)、ネガティブなユーモア (例：時々冗談でパートナーを卑下する) の 3 因子が含まれる関係的ユーモア尺度

(Relational Humor Inventory) を作成した。既婚者男女ともパートナーが用いるポジティブなユーモアが多ければ、親密度や結婚満足度が高くなり、ネガティブなユーモアが多ければ、結婚満足度が低くなり、自分やパートナーが用いるネガティブなユーモアが多ければ、要求-撤回

(demand-withdraw) も高くなることが示された。すなわち、夫婦関係に対して、ポジティブなユーモアは良い影響、ネガティブなユーモアは悪い影響があり、道具的ユーモアはあまり影響がない、といえる。

Vassilis, Christelle & Marie-Eve (2010) は、ユーモアスタイル尺度 (Humor Styles Questionnaire: Martin, 2007) を用いて、夫婦間ユーモアと結婚満足度との関係を検討した。ユーモアスタイルは、親和的 (affiliative)、自己高揚的 (self-enhancing)、攻撃的 (aggressive)、低俗的 (earthy)、自己卑下的 (self-defeating) の5種類のスタイルに分類された。その結果、夫の方が妻よりも親和的、自己高揚的、攻撃的、および低俗的ユーモアを多く使用しており、親和的ユーモアや自己高揚的ユーモアを多く使用すれば、結婚満足度が高くなると示された。また、離婚した夫婦と比べると、継続している夫婦の方が親和的ユーモアや自己高揚的ユーモアを多く使用し、攻撃的ユーモアや低俗的ユーモアを少なく使用していた。すなわち、夫婦関係に対して、親和的ユーモアや自己高揚的ユーモアは建設的であるが、攻撃的ユーモアや低俗的ユーモアは破壊的であり、自己卑下的ユーモアはあまり影響がない、といえる。この研究は夫婦関係がユーモアスタイルによって異なることを示唆した。

### 夫婦間ユーモアの表出とその動機

夫婦間ユーモアにおける先行研究の結果から、ユーモアは単一でポジティブな構成概念ではなく、ユーモアの下位概念を区別する必要があること、そして、使用するユーモアのスタイルや種類が異なれば、結婚生活に及ぼす影響が異なることがある程度解明されてきた。しかし、ユーモアの下位概念を区別した関係のユーモア尺度やユーモアスタイル尺度に関する先行研究は、実は、どのような動機でユーモアを使用するかという側面と、どのような形態・種類のユーモアを使用するかという側面が混在する形でユーモアを測定してきたと指摘されている (塚脇他, 2009a)。加えて、これらの研究では主に相関的な関連性が分析・検討されるにとどまり、ユーモアが結婚生活の満足度に対して因果的に影響していることを実証しているわけではない。また看過できないさらに重要な問題点として、これらの研究は夫婦を対象としてはいるものの、ほとんどが夫あるいは妻という個人レベルの分析・検討にとどまり、ペアレベルでのユーモア相互生起・相互影響過程として夫婦間ユーモアを分析・検討した研究は極めて少ない。

ユーモアを表出する動機は、個人がなぜユーモアを使用するか理由や達成したい目標 (why) を、また、ユーモアを表出する形態は、個人がどんなユーモアの刺激を使用するか言動 (what) を指す。ユーモア表出の動機に関して、上野 (1992) は、他者や自己を楽しませたい動機、他者や自己を攻撃したい動機、自己や他者の気持ちを支えたい動機の3つに、塚脇他 (2009b) は、関係構築、不満伝達、他者支援、印象操作、自己支援の5つの動機に分類している。また、ユーモア表出に関しては、塚脇他 (2009a) は、攻撃的、自虐的、遊戯的の3種類のユーモア表出が含まれるユーモア表出尺度を作成している。

周 (2012) は、ユーモアスタイル、ユーモア動機やユーモア表出などを測定する既存のユーモア尺度<sup>1</sup>を参考にしながら、小集団面接法と夫婦カップル面接法により、夫婦間ユーモアを表出する動機とユーモア表出スタイルに関する項目を収集し整理した。そして、台湾人夫婦ペアデータを用いた周 (2018) は、ユーモア動機を、利他的 (他者の気分高揚や他者との関係円滑化のため)、利己的 (自己の緊張緩和や気分転換のため)、関係配慮的 (配偶者との関係悪化の回避や葛藤の解消のため) の3種類に、ユーモアの表出を、相手攻撃 (配偶者をからかったり、皮肉を言ったりするといった、配偶者を攻撃する題材や刺激として使う)、自己卑下 (自分のした馬鹿なことや弱点や欠点を笑いのネタにするといった、自分を卑下する題材や刺激として使う)、言語遊戯 (だじゃれやナンセンスなたわごとといった、言葉を題材や刺激として使う) に分類した。Vassilis et al. (2010) が使用したユーモアスタイル尺度を周 (2018) が作成した夫婦間ユーモア尺度と対照すると、Vassilis et al. (2010) の親和的ユーモアは周 (2018) の関係配慮的動機と言語遊戯表出の両方を含み、自己高揚的ユーモアは利己的動機に類似しており、攻撃的ユーモアと低俗的ユーモアは相手攻撃表出に、自己卑下のユーモアは自己卑下表出に類似しているといつてよいであろう。

続いて周 (2018) は、夫婦間ユーモア表出の組み合わせ類型を夫卑下遊戯型、双多元表出型、双少表出型、妻卑下攻撃型の4つに分類し、夫婦間ユーモア動機とユーモア表出の類型が結婚の質に及ぼす効果を検討した。その結果、夫婦の関係配慮的動機が高ければ高いほど結婚生活の質が高くなり、夫婦の結婚生活の質は、双少表出型や夫卑下遊戯型の夫婦が最も高く、双多元表出型の夫婦が次に高く、妻卑下攻撃型の夫婦が最も低いこと、さらにユーモア動機とユーモア表出の類型の交互作用によって夫婦の結婚生活の質が異なることが示された。

## 本研究の目的

本研究では日本人夫婦を対象として、まず台湾人夫婦を対象に作成された周 (2018) のユーモア動機尺度とユーモア表出尺度が日本人夫婦に適用できるかどうかを検討する。そして、周 (2018) の研究を参考に、カップルのレベルで、日本人夫婦がお互いにどのような動機で、どのような形態のユーモアを表出するかを明らかにする。さらに、日本人夫婦のお互いのユーモアの表出動機と表出行動が夫婦の結婚生活の質に及ぼす影響を検討する。すなわち、日本人夫婦間の相互過程としてユーモア生起過程とユーモア影響過程を解明する。

## 方 法

### 調査対象者

---

<sup>1</sup> 以下の尺度が含まれている: Humor Styles Questionnaire (Martin, et al., 2003)、The Relational Humor Inventory1 (De Koning & Weiss, 2002)、Situational Humor Response Questionnaire (Martin & Lefcourt, 1984)、Coping Humor Scale (Martin & Lefcourt, 1983)、Sense of Humor Questionnaire (Svebak, 1996)、Multidimensional Sense of Humor Scale (Thorson & Powell, 1993)、多向度幽默感量表 (陳・陳, 2005)、ユーモア表出尺度 (塚脇他, 2009a)、ユーモア表出動機尺度 (塚脇他, 2009b)。

調査対象者は日本在住の 139 組の中高年日本人夫婦であり、質問紙を 2011 年 12 月－2012 年 4 月に S 大学の学生経由で彼らの親戚夫婦に届けて回収する託送法により調査を行った。対象者の内訳は、夫の年齢 38－86 歳（平均 51.51 歳）、妻の年齢 39－81 歳（平均 49.57 歳）、結婚年数 3－57 年（平均 25.10 年）、子供の人数 1－4 人（平均 2.23 人）、家庭の平均年収なし－1600 万円以上（平均約 220 万円）であった。

## 測定内容

普段の生活の中で、配偶者になぜ笑い話やおもしろいことを言ったりユーモアを用いたりしたのかという動機に相当する 13 項目のユーモア動機、どのように伝えたのかというユーモアの表現様式に相当する 12 項目のユーモア表出、および 14 項目の結婚生活の質を、夫婦別々に測定した。

## ユーモア動機

ユーモアを用いる動機については、周（2018）の 13 項目のユーモア動機尺度を用いた。各項目に関して、“よくあてはまる” から“まったくあてはまらない”までの 4 段階で評定させ、ユーモア動機が高いほど高得点になるように、4～1 点で得点化した。確認的因子分析により、利他的、関係配慮的、利己的といったユーモア動機の 3 因子（12 項目）の構成概念妥当性が認められた（夫の場合： $\chi^2_{(48)} = 93.59, p < .001, RMSEA = .083, CFI = .96, TLI = .95, SRMR = .058$ ；妻の場合： $\chi^2_{(48)} = 105.57, p < .001, RMSEA = .093, CFI = .95, TLI = .93, SRMR = .065$ ）。潜在変数と観測変数との対応関係の強さを評価するには、因子負荷量を用いるが、その標準化推定値が .50 以上であることが推奨される。また分散の程度を評価するには、各変数の平均分散抽出（Average Variance Extracted: AVE）を用いるが、.50 以上が必要となる（Hair, Black, Babin, Anderson & Tatham, 2006）。夫と妻におけるユーモア動機の 3 因子に属する項目の因子負荷量の標準化推定値は .64～.95 で、平均分散抽出（AVE）は .54～.80 であり、収束的妥当性が認められた。ユーモア動機の項目内容および確認的因子分析の結果を表 1 にまとめた。

## ユーモア表出

ユーモア表出についても、周（2018）の 12 項目のユーモア表出尺度を用いた。各項目に関して、“よくあてはまる” から“まったくあてはまらない”までの 4 段階で評定させ、ユーモア表出が高いほど高得点になるように、4～1 点で得点化した。確認的因子分析により、自己卑下、相手攻撃、言語遊戯といったユーモア表出の 3 因子の構成概念妥当性が認められた（夫の場合： $\chi^2_{(38)} = 56.70, p < .05, RMSEA = .060, CFI = .98, TLI = .97, SRMR = .038$ ；妻の場合： $\chi^2_{(38)} = 61.65, p < .01, RMSEA = .067, CFI = .97, TLI = .96, SRMR = .043$ ）。夫と妻における各因子に属する項目の因子負荷量の標準化推定値は .60～.88 で、平均分散抽出（AVE）は .50～.68 であり、収束的妥当性が認められた。ユーモア表出の項目内容および確認的因子分析の結果を表 2 にまとめた。

表1 ユーモア動機の項目内容と確証的因子分析の結果

| 因子名                | 項目内容                          | 夫            | 妻                |
|--------------------|-------------------------------|--------------|------------------|
| <u>因子Ⅰ 利他的動機</u>   |                               | <u>(.80)</u> | <u>(.78)</u>     |
|                    | 1. おもしろいことを言って人との関係を促進する      | .86          | .85              |
|                    | 2. コミュニケーションをうまくとるために、笑い話をする  | .90          | .92              |
|                    | 3. 笑い話で楽しい雰囲気をつくる             | .91          | .93              |
|                    | 4. ユーモアで友人を楽しくさせる             | .91          | .84              |
| <u>因子Ⅱ 関係配慮の動機</u> |                               | <u>(.58)</u> | <u>(.64)</u>     |
|                    | 10. 怒ったときでも、それをユーモアにして妻/夫に伝える | .80          | .64              |
|                    | 11. 冗談で不愉快な話題をそらす             | .70          | .78              |
|                    | 12. ユーモアで妻/夫との喧嘩を避ける          | .66          | .82              |
|                    | 13. 喧嘩のとき、ユーモアで緊張した雰囲気を和らげる   | .86          | .95              |
| <u>因子Ⅲ 利己的動機</u>   |                               | <u>(.54)</u> | <u>(.61)</u>     |
|                    | 5. 落ち込んでいるとき、ユーモアで自分に元気を出させる  | .68          | .74              |
|                    | 6. 困ったとき、面白いことを考えて気持ちをよくする    | .68          | .82              |
|                    | 7. おもしろい話を言って緊張を和らげる          | .88          | .86              |
|                    | 9. ユーモアで様々な状況を乗り越える           | .70          | .70              |
| 因子間相関              |                               |              |                  |
|                    | 因子Ⅰと因子Ⅱ                       | .50          | .23 <sup>a</sup> |
|                    | 因子Ⅰと因子Ⅲ                       | .77          | .62              |
|                    | 因子Ⅱと因子Ⅲ                       | .74          | .43              |

注1) ( )内の数値は平均分散抽出 (AVE) である。

注2) 項目“8. 気持ちが沈んだとき、ユーモアのセンスがなくなる”が削除された。

注3) <sup>a</sup>  $p < .01$ 。それを除けば、表内の数値はすべて  $p < .001$ 。

表2 ユーモア表出の項目内容と確証的因子分析の結果

| 因子名                        | 項目内容                                  | 夫            | 妻            |
|----------------------------|---------------------------------------|--------------|--------------|
| <u>因子Ⅰ 自己卑下 (自己を題材として)</u> |                                       | <u>(.59)</u> | <u>(.63)</u> |
|                            | 5. 自分のやった馬鹿なことをしゃべって笑いをとる             | .82          | .79          |
|                            | 6. 冗談や笑い話をすると、自分を卑下する (おとしめる) ことがよくある | .81          | .75          |
|                            | 7. 自分の弱点を笑い話にして、家族や友人を喜ばせる            | .74          | .81          |
|                            | 8. 自分の欠点を笑いのネタにして話す                   | .69          | .82          |
| <u>因子Ⅱ 相手攻撃 (相手を題材として)</u> |                                       | <u>(.50)</u> | <u>(.57)</u> |
|                            | 1. もし彼女/彼が何かミスをしたら、からかったりする           | .60          | .72          |
|                            | 2. 彼女/彼を軽く皮肉ったりする                     | .71          | .69          |
|                            | 3. 多少毒があるユーモアを言う                      | .76          | .85          |
|                            | 4. 過激な冗談を言う                           | .75          | .74          |
| <u>因子Ⅲ 言語遊戯 (言葉を題材として)</u> |                                       | <u>(.67)</u> | <u>(.68)</u> |
|                            | 10. だじゃれなどの言葉遊びをする                    | .79          | .84          |
|                            | 11. ナンセンスなたわごとを言う                     | .82          | .74          |
|                            | 12. 言葉の語呂合わせで笑いをとる                    | .85          | .88          |
| 因子間相関                      |                                       |              |              |
|                            | 因子Ⅰと因子Ⅱ                               | .56          | .55          |
|                            | 因子Ⅰと因子Ⅲ                               | .61          | .53          |
|                            | 因子Ⅱと因子Ⅲ                               | .43          | .43          |

注1) ( )内の数値は平均分散抽出 (AVE) である。

注2) 表内の数値はすべて  $p < .001$ 。

## 結婚生活の質

結婚生活の質については、周・深田（2014, 2015）と同様に、周・深田（2011）の14項目の結婚生活の質の評価尺度を使用した。各項目に関して、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階で評定させ、充実度あるいは後悔度が高いほど高得点になるように、4～1点で得点化した。この14項目を夫婦別々に因子分析した結果、夫と妻との因子構造が一致しており、充実度（7項目）と後悔度（7項目）の2つの下位尺度から構成されることが確認できた（夫の場合：固有値5.64と2.10、寄与率40.25%と14.98%、内的整合性.90と.77；妻の場合：固有値5.66と1.02、寄与率56.60%と1.16%、内的整合性.94と.83）。したがって、得点が高いほど充実度と後悔度が高いことを示し、結婚生活の質に対する意味は、2つの得点で逆になる。

なお、各項目の欠損値は1%以下であり、欠損値には平均値を代入して処理した。

## 結 果

### 各変数における夫婦間の差異

夫あるいは妻が報告したユーモア動機、ユーモア表出度、結婚生活の質に関して、それぞれ下位尺度別の平均得点（項目数で割ったもの）を算出し、表3に示した。これらの変数における夫と妻の差を検討するため、対応のある *t* 検定を行った。その結果、妻よりも夫の方が関係配慮的動機、そして言語遊戯の表出度は有意に高かった。また、妻よりも夫の方が結婚生活の質が有意に高い（充実度高、後悔度低）ことが示された。

表3 各変数の平均値に関する夫婦間差異

|        | 夫        |           | 妻        |           | <i>t</i> 値 |
|--------|----------|-----------|----------|-----------|------------|
|        | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |            |
| ユーモア動機 |          |           |          |           |            |
| 利他的    | 2.40     | .70       | 2.29     | .76       | 1.29       |
| 関係配慮的  | 1.75     | .60       | 1.58     | .59       | 2.66**     |
| 利己的    | 1.97     | .64       | 1.97     | .70       | .07        |
| ユーモア表出 |          |           |          |           |            |
| 自己卑下   | 1.84     | .69       | 1.89     | .70       | -.57       |
| 相手攻撃   | 1.88     | .61       | 1.77     | .59       | 1.63       |
| 言語遊戯   | 1.93     | .80       | 1.73     | .72       | 2.48*      |
| 結婚生活の質 |          |           |          |           |            |
| 充実度    | 2.80     | .72       | 2.51     | .83       | 5.21***    |
| 後悔度    | 1.38     | .44       | 1.50     | .54       | -2.77**    |

注1) \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

### ユーモア動機とユーモア表出における因子間の差異

夫あるいは妻が報告したユーモア動機の3因子間に、また、ユーモア表出の3因子間に差がある

かどうかを検討するため、3水準の被験者内1要因分散分析を行った。また、有意な効果が見られる場合は、Tukey法による多重比較の検定（有意水準はすべて5%に設定）を行った。

その結果、夫も妻もユーモア動機に関する因子間の差はかなり顕著であり、夫の場合も（ $F_{(2,138)} = 83.88, p < .001$ ）、妻の場合も（ $F_{(2,138)} = 64.31, p < .001$ ）、利他的動機が最も高く、利己的動機が次に高く、関係配慮的動機が最も低かった。ユーモア表出については、夫の場合は因子間の差はなかったが（ $F_{(2,138)} = 1.02, ns.$ ）、妻の場合は（ $F_{(2,138)} = 3.63, p < .05$ ）、自己卑下の表出度が最も高く、言語遊戯の表出度が最も低かった。

### ユーモア動機とユーモア表出が結婚生活の質に及ぼす影響

最後に、夫婦ペアを分析単位にして、夫婦の結婚生活の質がユーモア動機とユーモア表出によって異なるかどうかを検討するため、階層線形モデル（Hierarchical Linear Model）を用い、充実度と後悔度に関して、ベースモデルと以下の2つのモデルを設定し、分析を行った。モデル1は、夫婦の性別（夫=1、妻=-1；Campbell & Kashy, 2002 参照）、ユーモア動機3因子およびユーモア表出3因子の主効果7変数を投入し、モデル2は、それらの7変数の主効果に加えて、夫婦の性別、ユーモア動機3因子およびユーモア表出3因子の組み合わせである一次の交互作用効果と二次の交互作用効果を投入した。その際、有意な二次の交互作用効果が全く見られなかったため、二次の交互作用効果をモデル2から削除することにした。なお、多重共線性の可能性を排除するため、ユーモア動機とユーモア表出に関しては各因子の中心化得点（実測値－平均値）を用いた。

モデル1 Level 1  $Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j} \text{性別} + \beta_{nj} \text{ユーモア動機} + \beta_{pj} \text{ユーモア表出} + \varepsilon_{ij}$

Level 2  $\beta_{0j} = \gamma_{00} + \delta_{0j}$

$\beta_{kj} = \gamma_k, n = 2-4, p = 5-7, k = 1-7$

モデル2 Level 1  $Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1j} \text{性別} + \beta_{nj} \text{ユーモア動機} + \beta_{pj} \text{ユーモア表出} +$

$\beta_{qj} \text{性別} \times \text{ユーモア動機} + \beta_{rj} \text{性別} \times \text{ユーモア表出} +$

$\beta_{sj} \text{ユーモア動機} \times \text{ユーモア表出} + \varepsilon_{ij}$

Level 2  $\beta_{0j} = \gamma_{00} + \delta_{0j}$

$\beta_{ij} = \gamma_i, n = 2-4, p = 5-7, q = 8-10, r = 11-13, s = 14-22, t = 1-22$

各モデルにおいて、Level 1 は個人レベル、Level 2 はカップルレベルを意味し、 $Y_{ij}$  はカップル  $i$  の個人（夫あるいは妻） $j$  の充実度または後悔度の得点、 $\beta_{0j}$  はすべての夫と妻の充実度または後悔度の平均値である。 $\delta_{0j}$  と  $\varepsilon_{ij}$  はカップルと個人のレベルの変量項の指標であり、家庭間（between families）と家庭内（within family）の分散を表す。また、 $\delta_{0j} / (\delta_{0j} + \varepsilon_{ij})$  といった級内相関係数（Intra-Class Correlation Coefficient: ICC）は、充実度または後悔度における家庭間（カップル間）分散が全分散に占める比率を表す一方、1つの家庭の中の夫と妻の相関をも表している（Campbell & Kashy, 2002, p.332 に詳しい）。

まずベースモデルの結果から、充実度と後悔度の級内相関 ICC は.5940 (.3666/ (.3666+.2506))



と.3737 (.09089/ (.09089+.1523)) であること、つまり充実度と後悔度における全分散のうち、59%と37%はカップルのレベルの分散によって説明されること、また、同一家庭の中の夫と妻の相関は.59と.37と中程度であることが示された。

続いて2つの階層線形モデルの結果を表4にまとめた。充実度に関しては、モデル1の結果から、妻よりも夫の方が、また、関係配慮的動機が強い夫婦の方が、充実度が高くなることが示された。モデル2に関しては、モデル1で有意な効果が見られた変数の効果はそのまま維持されているが、交互作用効果はまったく有意ではなかった。

表4 階層線形モデルの結果

|                       | 充実度       |      |           |      | 後悔度       |      |           |      |
|-----------------------|-----------|------|-----------|------|-----------|------|-----------|------|
|                       | モデル1      |      | モデル2      |      | モデル1      |      | モデル2      |      |
| 固定効果                  | $\gamma$  | s.e. | $\gamma$  | s.e. | $\gamma$  | s.e. | $\gamma$  | s.e. |
| 切片                    | 2.66 ***  | .06  | 2.67 ***  | .06  | 1.44 ***  | .03  | 1.44 ***  | .04  |
| 性別 (夫=1、妻=-1)         | .14 ***   | .03  | .14 ***   | .03  | -.06 **   | .02  | -.07 **   | .02  |
| <u>ユーモア動機</u>         |           |      |           |      |           |      |           |      |
| 利他的                   | .01       | .07  | .02       | .07  | -.06      | .05  | -.06      | .05  |
| 関係配慮的                 | .20 **    | .07  | .18 *     | .08  | -.03      | .05  | -.01      | .05  |
| 利己的                   | -.08      | .07  | -.06      | .08  | .09 †     | .06  | .06       | .06  |
| <u>ユーモア表出</u>         |           |      |           |      |           |      |           |      |
| 自己卑下                  | .03       | .06  | .03       | .07  | .06       | .05  | .07       | .05  |
| 相手攻撃                  | -.05      | .07  | -.05      | .07  | .05       | .05  | .06       | .05  |
| 言語遊戯                  | .11 †     | .06  | .11 †     | .06  | -.08 †    | .04  | -.12 **   | .05  |
| <u>性別とユーモア動機の交互作用</u> |           |      |           |      |           |      |           |      |
| 性別×利他的                |           |      | -.04      | .06  |           |      | .08 †     | .05  |
| 性別×関係配慮的              |           |      | .11       | .07  |           |      | -.09 †    | .05  |
| 性別×利己的                |           |      | .04       | .06  |           |      | .05       | .04  |
| <u>性別とユーモア表出の交互作用</u> |           |      |           |      |           |      |           |      |
| 性別×自己卑下               |           |      | -.01      | .06  |           |      | .05       | .05  |
| 性別×相手攻撃               |           |      | -.10      | .07  |           |      | .15 **    | .05  |
| 性別×言語遊戯               |           |      | .11       | .07  |           |      | -.12 *    | .05  |
| <u>ユーモア動機と表出の交互作用</u> |           |      |           |      |           |      |           |      |
| 利他的×自己卑下              |           |      | -.10      | .09  |           |      | .04       | .07  |
| 利他的×相手攻撃              |           |      | .02       | .11  |           |      | -.12      | .08  |
| 利他的×言語遊戯              |           |      | -.01      | .09  |           |      | -.06      | .06  |
| 関係配慮的×自己卑下            |           |      | -.14      | .10  |           |      | .10       | .07  |
| 関係配慮的×相手攻撃            |           |      | .13       | .12  |           |      | -.03      | .08  |
| 関係配慮的×言語遊戯            |           |      | .03       | .09  |           |      | .03       | .06  |
| 利己的×自己卑下              |           |      | .16       | .11  |           |      | -.19 *    | .08  |
| 利己的×相手攻撃              |           |      | -.06      | .12  |           |      | .21 *     | .09  |
| 利己的×言語遊戯              |           |      | -.02      | .10  |           |      | .07       | .07  |
| <u>変数効果</u>           |           |      |           |      |           |      |           |      |
| レベル2                  | .3512 *** |      | .3334 *** |      | .0946 *** |      | .0996 *** |      |
| レベル1                  | .2046     |      | .1967     |      | .1387     |      | .1143     |      |

注1) \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

後悔度については、モデル1の結果から、夫よりも妻の方が後悔度はより高いことが示され、利己的動機の強い夫婦や言語遊戯表出の少ない夫婦の方が、後悔度は高くなるような傾向差がみられた。

モデル2において、性別の主効果はそのまま維持されているが、利己的動機の傾向効果は消え、言語遊戯表出の主効果は有意になった。また、性別と相手攻撃表出、性別と言語遊戯表出、利己的動機と自己卑下表出、ないし利己的動機と相手攻撃表出の間に有意な交互作用効果が見られた。

交互作用の内容を検討するため、単純傾斜の検定 (Aiken & West, 1993) を行った。性別と相手攻撃表出の交互作用パターンを図1に、性別と言語遊戯表出の交互作用パターンを図2に示した。夫の場合、相手攻撃表出や言語遊戯表出は後悔度に影響しないが ( $b = -.047, -.046, n.s.$ )、妻の場合、相手攻撃の表出度が高いほど後悔度が高くなる傾向 ( $b = .15, p < .10$ )、また言語遊戯の表出度が高いほど後悔度が低くなること ( $b = -.14, p < .01$ ) が見られた。

利己的動機と自己卑下表出の交互作用について、利己的動機の高群も低群も単純傾斜の検定による差異は有意でなかった ( $b = .02, -.21, n.s.$ ) (図3)。利己的動機と相手攻撃表出の交互作用に関しては、図4に示したように、利己的動機高群の傾斜が有意となり ( $b = .23, p < .05$ )、利己的動機高群では相手攻撃の表出度が低い夫婦よりも相手攻撃の表出度が高い夫婦の方が後悔度は高かったが、利己的動機低群の傾斜は逆方向となり ( $b = -.63, p < .05$ )、利己的動機低群では、相手攻撃の表出度が高い夫婦よりも相手攻撃の表出度が低い夫婦の方が後悔度は高かった。

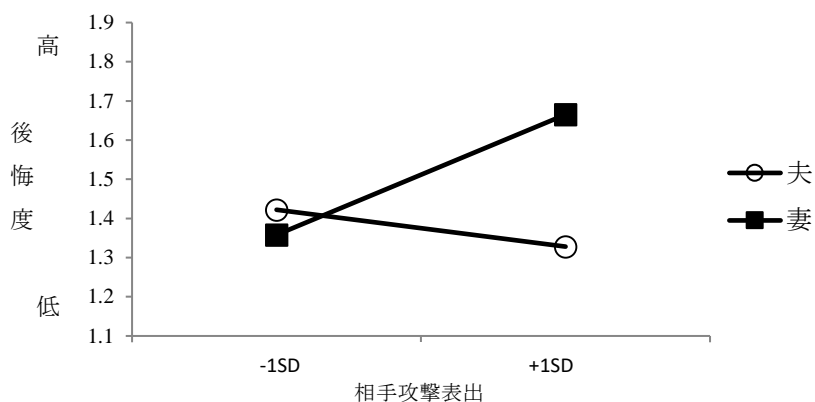


図1 後悔度に関する性別と相手攻撃表出の交互作用

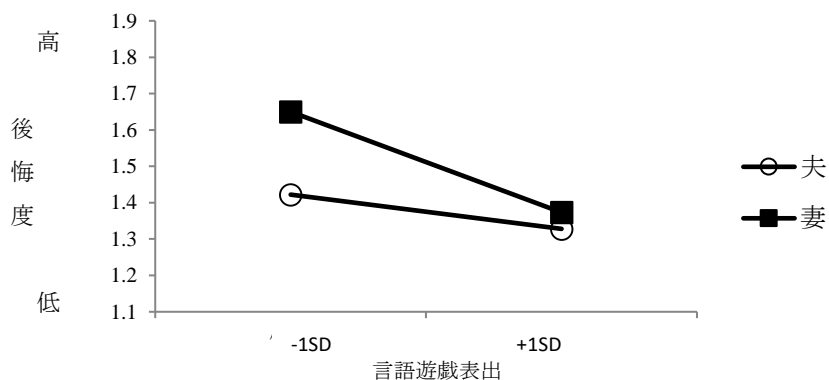


図2 後悔度に関する性別と言語遊戯表出の交互作用

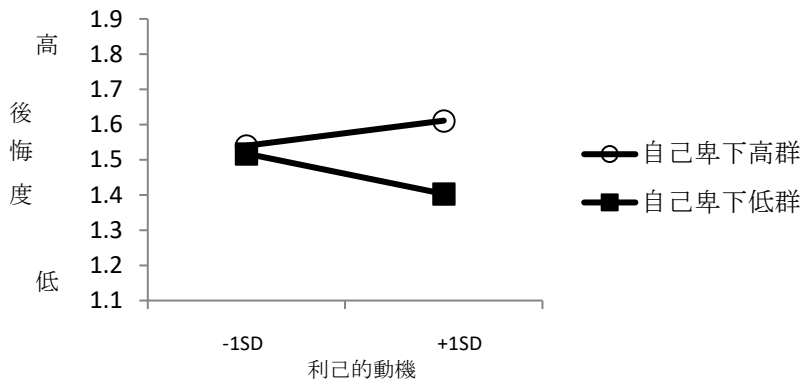


図3 後悔度に関する利己的動機と自己卑下表出の交互作用

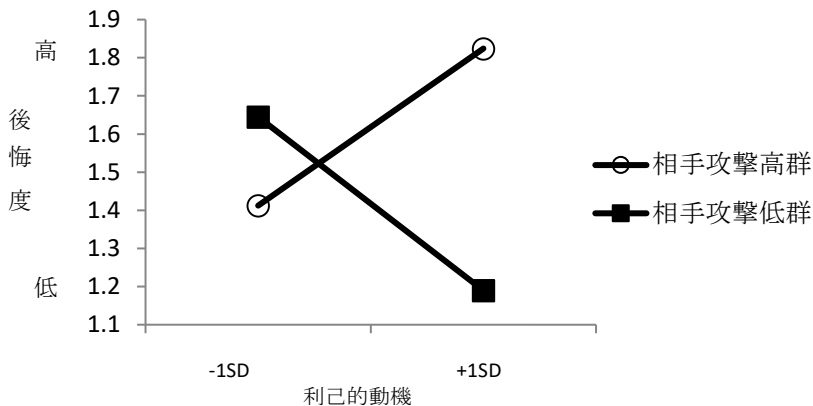


図4 後悔度に関する利己的動機と相手攻撃表出の交互作用

## 考 察

日本人夫婦ペアを対象とする本研究の目的は、夫婦間のユーモア動機とユーモア表出の実態を検討し、結婚生活の質に及ぼすそれらの影響を、夫婦間のユーモア相互生起過程およびユーモア相互影響過程の視点から検討することであった。先行研究を参考にしながら、確証的因子分析により、日本人夫婦のユーモア動機は、ユーモア使用の目標対象が異なる利他的、関係配慮的、利己的の3種類に、ユーモア表出は、使用するユーモアの題材や刺激内容が異なる自己卑下、相手攻撃、言語遊戯の3種類に分類できることが確認された。この結果は、周 (2018) の結果とほぼ一致しており、夫婦間ユーモア動機やユーモア表出の構成概念の妥当性は東アジア文化圏の国や下位文化を超えて保証されたといえる。

各変数における夫婦間の差異をみると、妻に比べ、夫の方が関係配慮的動機や言語遊戯の表出度

が高いこと、結婚生活の質を高く（充実度を高く、後悔度を低く）評価していることが示された。結婚生活に対する評価が妻に比べ夫の方で高かったことは、過去の研究（蕭・黄, 2010; 周, 2009; 周・深田, 2011, 2017; Verhofstadt, Buysse, Ickes, de Clercq & Peene, 2005 など）と一致している。ユーモア動機とユーモア表出に関する夫婦間差異に関しては、結婚生活の中で、夫の方は、よく言葉や文字を題材とするだけじゃれや語呂合わせなどを言って笑わせ、またお互いの関係を維持するためよくユーモアを表出することが示された。こうした夫婦間差異に関連する先行研究として、①Martin et al. (2003) は、男性の方が女性よりも親和的、自己支援的、攻撃的、および自己破滅的ユーモアの4種類のユーモアスタイルのいずれもより高いことを、②既婚者のデータを分析した Vassilis et al. (2010) は、既婚男性の方が既婚女性よりも親和的、自己高揚的、攻撃的および低俗的ユーモアを多く使用することを、③夫婦データを使用した周 (2018) は、夫が妻よりも関係配慮の動機や利他的動機がより強く、言語遊戯の表出度がより高いことを発見した。これらの先行研究は、本研究の結果と一致しており、男性のユーモア動機やユーモア表出が女性のそれらよりも強いことを示した。Crawford (2003) は、一般的に男性が社会的な地位と勢力がより高く、様々な物質的資源を持っているため、ユーモアの主導性を握っていると指摘した。本研究の結果はこの指摘を支持しており、今後、夫婦間ユーモア動機やユーモア表出は夫婦間の地位、勢力や資源などにより異なるかどうかをさらに検討する必要がある。

そして、夫婦の結婚生活の質に及ぼすユーモア動機とユーモア表出の影響を階層線形モデルの分析によって検討したところ、興味深い結果が得られた。ユーモアを表出する際の関係配慮的動機が高ければ、夫婦の充実度が増加するが、利己的動機や利他的動機による影響はあまり存在しない。また、自己卑下、相手攻撃、言語遊戯の3種類のユーモア表出のうちで、言語遊戯表出のみが直接的な促進効果のある（充実感を高め、後悔度を低下させる）ことが判明した。Vassilis et al. (2010) は、親和的ユーモアを多く使用すれば、結婚満足度が高くなることを示した。先述したように、親和的ユーモアの内容は、関係配慮的動機と言語遊戯表出の両方を含んでおり、本研究の結果は Vassilis らの結果と一致したといえる。すなわち、結婚生活を送る中で、夫婦間関係を維持・促進する動機からユーモアを使用すれば、あるいは洒落やナンセンスなユーモアを使用すれば、結婚生活の質に好影響をもたらすことが判明した。

その一方、利他的動機や利己的動機は結婚生活の質を直接に促進する効果がなく、これらの動機は夫婦関係に対しては関連性が低い。むしろ利他的動機は友人関係や同僚関係に、利己的動機は個人のストレス解消・低減に関連していると推測される。葉山・櫻井 (2008) は、個人の冗談行動が相互作用する相手や状況に影響を受けると示唆している。今後、ユーモアを使用する際の相手と状況を考慮しながら、種々のユーモア動機がどのような働きをしているのかを明らかにする必要がある。

なお、夫婦間の自己卑下ユーモア表出は結婚生活の質と関連性がないことが明らかとなった。先行研究でも、自己卑下のユーモアは結婚満足度と無関係であること (De Koning & Weiss, 2002; Vassilis et al., 2010)、また自虐的ユーモア表出は不安や抑うつと無関係であること (塚脇他, 2011) が示された。このように、自己卑下というユーモア表出様式は、個人の心理的健康の維持・促進にも夫婦関係の維持・促進にも影響をもたない可能性が大きい。

また、後悔度に関しては、性別と相手攻撃表出または言語遊戯表出との有意な交互作用効果、利己的動機と相手攻撃表出との有意な交互作用効果が見られた。夫の場合は、ユーモア表出と後悔度との関連が有意でなかったが、妻の場合は、相手攻撃の表出度が高いほど後悔度が高くなる傾向、あるいは言語遊戯の表出度が高いほど後悔度が低くなることが示された。先行研究では攻撃的ユーモアを多く使用すれば、結婚満足度が低くなり (De Koning & Weiss, 2002; Vassilis et al., 2010)、攻撃的ユーモア表出が多ければ、不安が高くなる (塚脇他, 2011) ことが報告されており、本研究の結果もこれらの先行研究の結果とある程度一致している。こうした結果は妻に限って見い出されており、女性が男性よりも情緒的感受性が強いこと (Chen, Yuan, Zheng, Chang & Luo, 2018) に関係していると考えられる。

最後に、相手攻撃の表出度が後悔度に及ぼす効果は利己的動機の高低によって全く逆となり、高い利己的動機に伴う多量の相手攻撃表出が後悔度を増加させることが示された点は注目に値する。自己の緊張緩和や気分転換のため (利己的動機から)、配偶者をからかったり皮肉ったりするようなユーモアを使用することは、自分ばかり大切に相手の気持ちを無視することになるので、夫婦関係に最も悪い影響を与えてしまうと考えられる。Cohan & Bradbury (1997)は、ユーモアの使用が長期的に結婚生活に悪影響を与えると指摘しており、本研究の結果は、ユーモアの動機と表出タイプを工夫して適切に使用しなければ、即時の悪影響さえ生じかねないことを解明した。それにこのことから、ユーモア動機とユーモア表出タイプの両方に注意を払わなければならないことが分かった。

このように、本研究は、夫婦間ユーモア動機とユーモア表出が結婚生活の質に及ぼす影響を検討し、興味深い示唆を得た。しかしながら、本研究の対象は日本人の中老年夫婦であり、ユーモア動機もユーモア表出もその得点の多く (夫または妻の因子別得点 12 個中 10 個) が 2.0 以下でかなり低いものであったことに留意しなければならない。ちなみに周 (2018) が対象とした台湾人夫婦のユーモア動機とユーモア表出は 2.07~2.85 であった。夫婦として長年生活し続けてきたことに起因するユーモア動機およびユーモア表出の低下の可能性と、年代差 (ユーモアを多用しない年代) に起因するもともと低水準のユーモア動機およびユーモア表出の可能性が考えられるので、今後、より若い年齢層の夫婦を対象として、その差異を検討していく必要がある。そして、夫婦関係だけでなく、家庭内の親子関係・きょうだい関係や家庭外の友人関係・知人関係など、さまざまな対人関係の中でのユーモアの動機・表出の影響の特徴を把握することも重要である。また、夫婦間の地位・勢力・資源関係などの要因を取り上げて、ユーモアの使用と結婚の質との関係に及ぼすそれらの要因の影響を検討することにより、研究をさらに深化させる方向が考えられる。なお、本研究で使用したユーモア動機尺度とユーモア表出尺度における一部の項目に夫婦間の動機や表出として適切でない表現が混入していた。友人や人といった夫婦間ユーモアの測定にふさわしくない表現を適切な表現 (例えば、配偶者、夫/妻) に修正することによって、測定の精度を高めることが必要であろう。

## 引用文献

- 阿部 晋吾 (2018). 夫婦を対象としたユーモアコーピングトレーニングの有効性—高自己愛者への介入に注目して— 梅花女子大学心理こども学部紀要, **8**, 10-16.
- Campbell, L., & Kashy, D. A. (2002). Estimating actor, partner, and interaction effects for dyadic data using PROC MIXED and HLM: A user-friendly guide. *Personal Relationships*, **9**, 327-342.
- 陳 淑蓉・陳 學志 (2005). 幽默感的定義與測量：多向度幽默感量表之編製 應用心理研究, **26**, 167-187.
- Chen, X., Yuan, H., Zheng, T., Chang, Y., & Luo, Y. (2018). Females are more sensitive to opponent's emotional feedback: Evidence from event-related potentials. *Frontiers in Human Neuroscience*, **12**, 1-9. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2018.00275>
- Cohan, C. L., & Bradbury, T. N. (1997). Negative life events, marital interaction, and the longitudinal course of newlywed marriage. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 114-128.
- Crawford, M. (2003). Gender and humor in social context. *Journal of Pragmatics*, **35**, 1413-1430.
- De Koning, E., & Weiss, R. L. (2002). The relational humor inventory: Functions of humor in close relationships. *The American Journal of Family Therapy*, **30**, 1-18.
- Hair, J. F., Black, W., Babin, B., Anderson, R. E., & Tatham, R. L. (2006). *Multivariate data analysis (6<sup>th</sup> ed.)*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- 蕭 英玲・黃 芳銘 (2010). 婚姻滿意度與憂鬱傾向：貫時性對偶分析 中華心理學刊, **52(4)**, 337-396.
- 石原 俊一 (2014). 対人ストレスユーモアコーピングにおける心理学的健康への効果 人間科学研究, **36**, 67-77.
- 周 玉慧 (2009). 夫妻間衝突因應方略類型及其影響 中華心理學刊, **51(1)**, 81-99.
- 周 玉慧 (2012). 夫妻間幽默：一個歷程觀點的研究 行政院國家科學委員會專題計畫, 99-2410-H-001-042-MY2.
- 周 玉慧 (2018). 夫妻間幽默運用及其影響 中華心理學刊, **60(1)**, 33-55.
- 周 玉慧・深田 博己 (2011). 夫婦間サポート獲得方略の使用類型がサポート受け取りと結婚の質に及ぼす影響 心理学研究, **82 (3)**, 231-239.
- 周 玉慧・深田 博己 (2014). 結婚の質に及ぼす夫婦間のサポートの授受とサポート獲得方略の授受の関係：二者関係における相互作用過程の観点から 対人コミュニケーション研究, **2**, 1-18.
- 周 玉慧・深田 博己 (2015). 夫婦関係に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の影響 対人コミュニケーション研究, **3**, 1-18.
- 周 玉慧・深田 博己 (2017). 夫婦関係に及ぼす葛藤対処方略の影響：行為者 - パートナー相互依存モデルに基づく検討 対人コミュニケーション研究, **5**, 1-22.
- Lauer, R. H., Lauer, J. C., & Kerr S. T. (1990). The long-term marriage: Perception of stability and satisfaction. *International Journal of Aging and Human Development*, **31(3)**, 189-195.

- 牧野 幸志 (1999). 説得に及ぼすユーモアの種類の種類と量の効果 感情心理学研究, **6**, 1-16.
- Martin, R. A. (2001). Humor, laughter, physical health: Methodological issues and research findings. *Psychological Bulletin*, **127**, 504-519.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor: An integrative approach*. Elsevier Academic Press.
- Martin, R. A., & Lefcourt, H. M. (1983). Sense of humor as a moderator of the relation between stressors and moods. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45(6)**, 1313-1324.
- Martin, R. A., & Lefcourt, H. M. (1984). Situational Humor Response Questionnaire: Quantitative measure of sense of humor. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47(1)**, 145-155.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the Humor Styles Questionnaire. *Journal of Research in Personality*, **37**, 48-75.
- 宮戸 美樹 (2016). ユーモア表出行動と表出相手との親密さの関連 横浜国立大学教育人間科学部 紀要 I 教育科学, **18**, 115-127.
- Overall, N. C., Fletcher, G. J. O., Simpson, J. A., & Sibley, C. G. (2009). Regulating partners in intimate relationships: The costs and benefits of different communication strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96(3)**, 620-639.
- Rust, J., & Goldstein, J. (1989). Humor in marital adjustment. *Humor: International Journal of Humor Research*, **2**, 217-224.
- Svebak, S. (1996). The development of the Sense of Humor Questionnaire: From SHQ to SHQ-6. *Humor: International Journal of Humor Research*, **9**, 341-361.
- 谷 忠邦・大坊 郁夫 (2008). ユーモアと社会心理学的変数との関連についての基礎的研究 対人社会心理学研究, **8**, 129-137.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1993). Development and validation of a multidimensional sense of humor scale. *Journal of Clinical Psychology*, **48**, 13-23.
- 塚脇 涼太 (2011). ユーモア表出の類型ごとにみた動機の構造 広島大学心理学研究, **11**, 49-56.
- 塚脇 涼太 (2018). 攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能をもつのか: 相手との親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討 対人コミュニケーション研究, **6**, 13-28.
- 塚脇 涼太・深田 博己・樋口 匡貴 (2011). ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程 実験社会心理学研究, **51(1)**, 43-51.
- 塚脇 涼太・樋口 匡貴・深田 博己 (2009a). ユーモア表出と自己受容、攻撃性、愛他性との関係 心理学研究, **80**, 339-344.
- 塚脇 涼太・平川 真 (2012). ユーモア表出及びその動機と心理社会的健康 パーソナリティ研究, **21(1)**, 53-62.
- 塚脇 涼太・越 良子・樋口 匡貴・深田 博己 (2009b). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか? ——ユーモア表出動機の検討—— 心理学研究, **80(5)**, 397-404.
- 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, **7**,

112-120.

上野 行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係 心理学研究, **64**, 247-254.

Vassilis, S., Christelle, L., & Marie-Eve, D. (2010). Bad humor, bad marriage: Humor styles in divorced and married couples. *Europe's Journal of Psychology*, **6(3)**, 94-121.

Verhofstadt, L. L., Buysse, A., Ickes, W., de Clercq, A., & Peene, O. J. (2005). Conflict and support interactions in marriage: An analysis of couples' interactive behavior and on-line cognition. *Personal Relationship*, **12**, 23-42.

葉山 大地・櫻井 茂男 (2008). 友人に対する冗談関係の認知が冗談行動へ及ぼす影響 心理学研究, **79(1)**, 18-26.

Ziv, A., & Gadish, O. (1989). Humor and marital satisfaction. *The Journal of Social Psychology*, **129(6)**, 759-768.



# **Effects of marital couples' humor on relationship quality**

**Yuh-Huey JOU** (Academia Sinica, Taiwan)

and

**Hiromi FUKADA** (Hiroshima Bunkyo University)

and

**Koshi MAKINO** (Setsunan University)

Focusing on humorous communication, this study explored the motivation for and the expression of humor used by married couples from the perspective of dyadic interaction, and examined the effects of humor motivation and expression on marital quality. Data were collected from 139 married couples in Japan. The measurement included 3 factors of humor motivation (self-interested, altruistic and relational), 3 factors of humor expression (self-deprecating, partner-aggressive and language-playful), and marital quality (satisfaction and regret). The validity of scales for humor motivation and expression was provided by confirmatory factor analysis. Husbands had higher scores than their wives on relational motivation, used language-playful expression more often, and also reported higher levels of marital quality. Couples' marital quality was varied by humor motivation and humor expression. Those who reported higher relational motivation or used more language-playful expression tended to report better marital quality. The interaction effect of humor motivation and expression on regret was also found. Those who reported higher self-interested motivation and higher partner-aggressive expression showed the worst marital quality.

**Key words:** humor motivation, humor expression, marital quality, marital couples, Hierarchical Linear Modeling

